

『北欧型福祉を半世紀体験して知った税金が戻ってくる国の秘密

幼いときからの教育？選挙の仕組み？それとも？』

デンマーク社会研究協会理事長 片岡豊先生

○ゆき 皆さん、こんばんは。

首にまいているの何かわかりますか？ ある日、民生委員さんが私のところへ訪ねてきて、「81 歳を超えた方にはこれを差し上げています。水で浸して首に巻いていると熱中症にならなりません」って。デンマークのユタカさんに、日本が今どんなに暑いか知っていたかどうかと、これをしてきました。

ユタカさんとは長い長〜いおつき合いです、先々々週に来てくださった山崎章郎 doctor から「デンマークの福祉と医療を見たいので団を編成します。団長として一緒に行ってください」と言われたことがありました。ところが、デンマークは「施設で看取る」ということがないのです。それぞれのお家を医師やナースが訪ねる仕組みですから、団体で訪問するわけにはいかないのです。そこで、さまざまなおいひかを訪ねることをユタカさんが全部コーディネートしてくださいました。それで、ユタカさん、フミオさん、ユキさんと、楽しい日々を過ごした次第です。

ユタカさんは、キェルケゴールにほれ込んで 18 歳でデンマークに行き、とても素敵な奥様と一緒にいられて、お子さんも 3 人生まれました。そのようなわけで、日本語のほう若干怪しくなっておられるのです。でも、デンマークから zoom で何人か助っ人が入ってくださっていますので大丈夫だと思います。ユタカさん、さっきみたいに、黒眼鏡かけてみてください。あれをすると、全然違う人みたいになるのです。ああ、これこれ。

○片岡 あはははは。

○ゆき 眼鏡ひとつでギャングみたいに見えるのですが、ふだんはこのようなユタカさんです。

それでは、お任せしますので、四つのセクションに分けて話していただきます。では、よろしくお願いします。

○片岡 ありがとうございます。こんにちは。片岡豊です。今、画面には、マホ、シゲル、コウセイとか、エグモントでの顔見知りに応援してくれているので、頑張ってこれから 1 時間半、忘れた日本語を何とかしゃべってみます。

全体の流れを簡単に説明させていただきます。きょうのトピックというかテーマは、「善い人生とは？」ということにしました。倫理的価値ということで「善い人生とは？」と。

最初にデンマークの北欧型福祉は手厚いですよという日々を単に説明したいと思います。

本題に入っていきますけれど、この手厚い福祉が可能になる背景とといいますか、源泉とといいますか、それはデンマークのデモクラシーということで、「労働とデモクラシー」という題をつけました。そして、教育、農民運動、そして労働者運動という、三つの要素について説明させていただきます。

その次に、デンマークの高齢者は福祉といわれ、ノーマライゼーション、共生やインクルージョンという概念が使われています。では、障害者の福祉はどうなっているかということをお簡単に抜粋させていただきます。

3番目、最後にデンマークの社会的価値観、現在の社会的価値観はどうなっているかをお話しさせてもらって、そこで、「善い人生とは何か？」と、さんと一緒に考えさせてもらえればと思います。

それでは、次のスライドをお願いします。

「3つの福祉モデル」ということです。北欧の福祉の特徴を三角形の福祉モデルで説明したいと思います。いわゆる先進国といわれるところは、多かれ少なかれ福祉国家といえます。つまり、国民のすべてが一定の生活水準と安心して人生を送ることができるように、公的部門が——公的部門とは国ですが——責任を持って福祉を提供しています。そして、福祉国家は幾つかの異なったタイプに分けることができます。それを説明しているのが、この三角形の福祉モデルです。

まず一番右側ですけれど、アメリカ型福祉モデル、あるいはアメリカ型モデル。国としてはアメリカ、カナダ、オーストラリア、それからサッチャー政権時代、1970年代のイギリスなどの福祉タイプ。社会保障の主な担い手は、失業保険や医療保険などの民間市場です。国は、貧困者など限られた対象だけに最低限度の支援を行って、残りは主に民間のボランティアや宗教団体、あるいは民間基金の救済事業に託されています。

真ん中のモデルですけれども、これは欧州大陸型モデルと言っていいと思います。主な地域はイタリア、フランス、オーストリア、ドイツなどの中央・南ヨーロッパ諸国が典型的です。社会保障は、主に雇用と労働に関連した労働市場、それと家族を中心とした市民社会が大きな役割を占めています。

そして、一番左端、北欧の福祉タイプがこれに当たります。デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランドの諸国です。このモデルの特徴は、公共部門の市町村、県あるいは州などの地方自治体が、福祉や医療保険のサービスを行い、国は主に年金や補助手当などの給付を通して所得保障を行って、そして全国各地の福祉サービスの質を監査・監督する役目を担っています。

家族やプライベートの市民社会は、主に文化・スポーツ活動にボランティアとしてかかわっていますが、福祉的な支援サービスにはほとんどかかわることはありません。それらは専門職の仕事だと考えられています。そのほかに、労働組合と企業連合、雇用主連合が雇用政策に大きな影響をもっています。

ところで、この福祉モデルでは、福祉とは介護や生活保護などの狭い意味だけでなく、医

療・保険・保育・教育・雇用(仕事です)・労働市場・所得保障などを含む、広い意味で使われています。ただし、このモデルはあくまでも大ざっぱな分類で、これらのモデルに正確に当てはまる国はないといっていると思います。国々によって、そして頻繁に交代する政府によって、政策はころころ変わってきます。北欧型福祉モデルは、このように、保健・社会保障などのサービスのほぼすべてに公的部門が責任を持っていて、国民に無料で供給・給付しています。それが北欧諸国に共通した福祉政策の特徴と言えると思います。次のスライドをお願いします。

デンマークでは、子供の教育費の心配がありません。デンマークの福祉モデルがどんなものかイメージしていただけるように、僕自身と僕の周辺のケースを取り上げてお話ししたいと思います。

僕は東京生まれで、高校を出てすぐデンマークに行きました。1968年の春です。そして、デンマークの語学学校で知り合ったデンマーク人女性と一緒に、二人とも大学で勉強することになりました。学生るとき、長男と長女が生まれました。出産の費用を含む医療、保健サービスはすべて無料です。ちなみにデンマークでは、人工授精や中絶も無料です。僕たちは二人とも、奨学金で生活をしていました。学費は、大学院まで無料です。そして奨学金は、18歳以上の学生全員に生活費として支給され、返済義務がありません。奨学金の額は、現在月約10万円程度です。保育所の利用は、当時学生ということで収入が少ないので無料になりました。親の僕たちはその後大学を終えて、それぞれ学校教員と心理士として働いて、数年前に定年引退しました。また子供たち二人も大学教育を終えて、現在はそれぞれ大学教員と労働心理士として働いています。次のスライドをお願いします。

「家族に負担のない、尊厳のある生活」ということです。日本と北欧の生活は多くの点で異なりますけれども、そのうち一つだけ例を挙げると、北欧では18歳以上の身内の人に対して扶養義務がありません。高齢者に対しても同じです。ですから、介助を必要とする成人の子供や高齢の親をケアするとか、扶養する義務が家族にはありません。

障害のある人もない人も、大体18歳以上になると家族を離れて、自分に向いた社会生活をするようになります。そして、何らかの理由で自立した生活を営むことができない、介助などの支援が必要だという場合は、公的部門が生活を保障して、支援する責任と義務があります。ただし、がんやALSなどの重い病気になった方や、重度あるいは重複障害のある人を身内で介助したいという場合は、介助をする家族の人にホームヘルパーの給料と同じ程度の介助手当が支給される可能性があります。そうすることによって、障害者年金や疾病年金などに頼らずに、介助者の生活が保障されることになります。では、次のスライド。「老後の心配がない」をお願いします。

さて、高齢者の仲間入りした僕たちの今後の生活の見通しはどうでしょうか？ 僕たちは人口4,500人ほどの郊外の町に住んでいます。湖や畑などの自然に近いところで、静かで

環境のよい住宅地です。オーフスという、デンマークで2番目に大きい都心部まで約20キロメートル、車で25分程度の所です。

住んでいる集落というか、村というかの中には、自宅から歩いて15分ほどのところに市営の高齢者向けの地域支援センターがあります。ローカルセンターと呼んでいますけれど、そこには地域の高齢者が利用できるカフェ、リハビリ、フィットネス、集会場などがあって、さらに看護師、ホームヘルパー、理学・作業療法士などが配置されています。

僕たちが何らかの理由で介助が必要となってくると、そこからホームヘルパーや訪問看護師が派遣されてきます。ニーズに応じて、1日数回まで訪問を受けることができます。自宅の生活が不安になれば、このセンターに隣接したケアつき住宅に移り住むことも選択肢に入ってきます。これらがすべて高齢者年金だけで受けられ、選択可能なため、老後の生活を心配して貯金をする必要がありません。

ということで、次のスライド、「命の保障＝所得保障」で、どのような所得保障がされているのかを見てみたいと思います。簡単に見ますと、高齢者は、税込ですけれど、一人住まいだと26万6,000円、夫婦住まいだと1人分が約20万円。障害者は、障害者年金が36万円、それプラスいろいろな補助があるのですけれど、一応生活費としてこの基本額があります。それから生活保護を受けている方々は、30歳以上の場合には約22万。子供がいる一人親の生活保護者の場合には30万円。それから失業者、求職者です。フルタイムで働いていた人たちは、月36万7,000円。パートタイムの働きをしていた人が、必要になった場合には最高額25万円まで。これを2年間受けることができます。

こういふことで、我が家の家計を見ると、年金収入として月約40万です。1人20万が2人分ですので、約40万。そのうちの半分、約20万円が住宅費として使われます。住宅ローン、不動産税、電気・暖房、上下水道。あと別荘地を持っているのでその維持費など、住宅費が20万円です。残りの20万のうち10万円が食費です。そして最後の10万円が個人的な消費です。孫へのプレゼントだとか、衣服だとか、ちょっとした旅行、交通費などにかかります。このように、国民年金で生活している僕たちは、毎月ほぼ使い切つての家計なので、経済的にはそれほど余裕はありませんが、幸い日本のように冠婚葬祭にお金をかける習慣がありませんので、この予算で何とかやっていけています。スライド次おねがいします。

「介護職の賃金」ですけれど、お仕事をしている人たちの収入はどうでしょうか？ もちろん、企業のリーダー職とか管理職とか、行政の管理職の人たちのお給料とホームヘルパーさんのお給料には差がありますが、それでも国際的に比較してみるとデンマークは、一般的に所得格差があまりないところです。

その方たちの賃金がどうかというと、お掃除をする清掃係、無資格の人たちは税込初任給で月40万円。1年間の講習を受けて資格を持ったホームヘルパーさんが、約49万から50万円。2年半の講習を受けるとさらにそれに何万円かアップされます。

さらに、ホームヘルパーや介護士などの資格を取る養成学校に行くとお給料をもらえます。ホームヘルパーの実習生が21万円、介護士の実習生が23万。資格を取る間もお給料が

もらえることになっています。

それでは次のスライド、「汚職の少ない国デンマーク」にうつります。

デンマークも、いろいろな課題を抱えていますけれど、日本と比較するとデンマークは、とても手厚い福祉政策をとっていると言えます。そしてそれは、とても高い税金で賄われています。25%の消費税のほかに所得税、市税(地方自治体税と言います)、法人税、ぜいたく品税などの諸税合わせると、国民総生産の50%に近い税金を払っています。

なぜ、国民はこのような高い税金を払うことに甘んじているのでしょうか？

このことをデンマーク人に尋ねると、「高い税金に見合った十分な公的サービスが受けられ、安心できる生活が保障されているから」という回答が戻ってきます。「個人で将来のために貯蓄をするのではなくて、国や自治体に税としてお預けしている」という考えです。そして、そのような考えが当たり前のように市民から聞けるのも、政府や行政に対する市民の信頼がとても高いからだと思います。

その裏づけとして、世界各国の汚職を監視する国際機関「Transparency International」という機関があるのですが、そこの調査によると、デンマークは世界185カ国でも最も汚職が少ない国という結果が発表されています。それも、ほぼ毎年同じ結果が出ています。

ここまでが最初のセクションになります。デンマークの現状はこういうところですが、ここまですでに何か御質問があれば…。

○ゆき 質問があったら、前の方へ出てください。今のところすべて納得ですか？ うなずいているので、次のコーナーに行ってもいいですか？ ではユタカさん、次のセクションに…。

○片岡 はい。では次のスライド、「第1セクション 労働とデモクラシー」というところをお願いします。ここでは、「労働とデモクラシー」とつけましたが、デンマークにおけるデモクラシーの歴史を簡単にお話ししたいと思います。次のスライドをお願いします。

北欧の福祉は、このように高福祉・高負担ということが特徴だということになりますけれど、この高福祉・高負担という政策をとっている政府、それから国会は、国民が選挙で選んだ人たちです。つまり国民の大半が、「税金は高いけれど、手厚い福祉によって善い人生を得ることができる」と考えているからだと思います。

そして、デンマークでは国会議員選挙の投票率が85%以上、地方議員選挙はやや低くて平均75%。どちらにしても政治に対する国民の関心がとても高いと言えます。現在、デンマークの政府は40歳そこそこの女性、メッテ・フレデリクセンさんが首相ですが、彼女の政党は、北欧で長い伝統を持つ社会民主党です。

このデンマークの政治的状況を説明するために、今から200年ほど前にさかのぼって、歴史的な背景を見てみたいと思います。200年と言うと、日本でいえば江戸時代、江戸時代後期以降の1800年代のことですが、当時はフランス革命がヨーロッパ各地を揺り動か

して、戦争好きなナポレオンが周辺国家に喧嘩をしかけていました。デンマークは、一時期はイギリスとフランスに次ぐ大国と自負していたのですが、一連の戦争で敗北して、領土を取られて一小国に成り下がってしまいました。そこでデンマークはナポレオンと組んで、北欧での位置を取り戻そうとしたのですが、お隣のドイツのビスマルク率いる軍隊に大敗して、領土をさらに失って、国としての存在も危うくなってしまいました。

このような政治的な背景のもとに、国の権力を王室から裕福な商人や貴族や大農などの有力者に渡して、国の再建を委ねることになりました。1849 年の 6 月 5 日にデンマーク最初の憲法が公布されて、それまでの絶対王政の時代が終わりを告げて、主権者の国民の代表による国会議員が国政を行う、民主主義がスタートします。

この最初の憲法、1849 年の憲法では、民主主義の原則とされている言論の自由や、団結の自由や、私有権などについて謳われているのですが、選挙権は財産のある裕福な国民にしかなく、一般の国民、貧しい国民や女性には選挙権がありませんでした。普通選挙による現在の政治的な民主主義制度は、これからさらにあとになって、1915 年に憲法改革で導入されることになります。次のスライドをお願いします。

デンマークの学者でハルコックさんという人がいるのですが、『デモクラシーとは何か』という論文を書いております。彼はそこで、「デモクラシーとはプロセスである。ライフスタイルである」と説明しています。そうした意味では、デンマークの民主主義は、最初の憲法が発効されて以来、こんにちに至るまで、ジグザグと進んできた社会的プロセスだと理解しています。

そこで、政治的な制度の展開と並行して、デンマークの民主的な伝統を形づくってきたと思われる幾つかの要素について説明したいと思います。

デンマークのデモクラシーが形成されていくプロセスで、特に重要と思われる三つの要素があります。その一つ目が「生」。人生とか、生命とかいう意味での「生の学校」と呼ばれる、教育が一つ。

二つ目が、当時の国民の 8 割を占めていた農民たちの動き。

三つ目が、少し遅れて出てきた、農場を追い出された貧しい農民が地方から都心に移って新しい階級となった、労働者たちの運動です。

歴史的には 1800 年代後半から 1900 年代前半に当たるわけですが、この三つの要素、教育・農民・労働者の運動、これがデンマークのデモクラシーを形成していく三つの要素だと思います。それを、これから一つ一つ見ていきたいと思います。次のスライドをお願いします。

「生の学校」と言いますか、漢字で見たほうが早いと思いますけれど、当時の国民の 8 割は農民で、その大半が読み書きができない文盲だったために、議会制度になったとはいえ、国会は結局、お金持ちのエリートが集まりになってしまいました。

そこでグロントヴィという、牧師さんで、政治家で、文学者、それから詩集をたくさん書いている詩人、哲学者でもあったとても多才な人がいて、その人が農民を中心とした若者た

ちに、生きた言葉を通して歴史や文学などを教え、民主主義の担い手を数多く育てる必要性を訴えました。

これがデンマークでの「対話」の始まりです。教育の場も、冬の農閑期に寝泊まりを一緒にしながら、ともに学ぶことを提案しました。そのような教育の場として、1844年に最初のフォルケホイスコーレ、国民のための高等学校ができました。それ以降、急激にフォルケホイスコーレが全国に広まっていきます。このフォルケホイスコーレは、当時の農民・イコール国民ですが、彼らへの啓発運動として、デモクラシー・民主主義の形成に非常に大きな影響がありました。同時にデンマークでは、現代的な農業の産業国として発展するために必要な知識、情報、技術、それから組織化の基盤がそこでつくられることになります。

こんにち 70 校あるフォルケホイスコーレに共通していることは、まず 18 歳以上であればだれでも入れること。入学資格を問わず、テストもなく、3 カ月から半年ぐらいの短期間、寝泊まりを一緒にしながら、生きた言葉、ダイアログを使って、対話を通して人生の哲学や、生活の知識や、政治的なデモクラシーについて学びを深めることになります。短期間とはいえ、寝泊まりを一緒にして築かれる人間関係は、若者の人生にとってとても貴重なネットワークとなるはずです。現在、このフォルケホイスコーレは、デンマークのほかの北欧諸国にも広がって、ノルウェーやスウェーデンには、デンマークより多くのフォルケホイスコーレができています。次のスライドをお願いします。

このフォルケホイスコーレと同じ時期にできた学校で、未成年を対象とした学校、エフタスコーレというのがあります。英語でいえば、after school。「義務教育が終わったあと」というような意味で考えていいと思いますけれど、主に 15 歳から 16 歳の若者を対象としています。9 年間の義務教育を終えたあとの 1 年間を、共同生活、寝泊まりを一緒にしながら、自分の好きな科目を選んで学んでいく人が非常に多いです。同じ世代の約 3 割が、エフタスコーレで学ぶことを選んでいます。

先ほど、デンマークにはフォルケホイスコーレが 70 校ほどあると言いましたが、エフタスコーレはその 3 倍以上、240 校あります。デンマークには、学生の不登校や引きこもりは、個別的にはあっても、日本のように社会的な現象としてはありません。その原因というか理由は、このエフタスコーレの存在にあると僕は見ています。このことについては、別の機会に改めてお話ししたいと思っています。次のスライドをお願いします。

僕は、デンマークのフォルケホイスコーレで 20 年間ほど働いていたのですが、なぜフォルケホイスコーレという職場に魅かれたのかというと、僕は日本で戦後初めてつくられた全寮制高校に行きまして、そこで 3 年過ごしました。そして、高校卒業後すぐにデンマークに留学して、デンマーク語を学ぶためにフォルケホイスコーレを四つばかり転々としていました。フォルケホイスコーレの共同生活が、僕にはぴったりだったのでしょう。おかげで多くの友達ができました。特に女友達が多かったです。今の相方は、当時のそのうちの 1 人です。

僕が働いたエグモントホイスコーレについては、別途紹介させていただくことにして、デ

ンマークのデモクラシーが形成される上で、もう一つの要素であった農民運動について話を続けたいと思います。ということで、次のスライドをお願いします。

200 年ほど前に戻りますけれど、農業は主に貴族や豪農——大きな農場を持った豪農や、あるいは教会が広い領地を所有していて、奴隷に近い農奴や貧しい農民たちを駆り出して、麦などの畑作を中心としてやっていたのですけれど、1800 年代ぐらいになるとアメリカ大陸から大量に安い麦が輸入されてきます。そのために、農業の経営を畜産業に切りかえるようになりました。特に牛乳やチーズなどの乳製品の生産のために、酪農が広まっていきます。それを担うのが、以前のような貴族や豪農の大地主のみではなくて、畑の一部を譲り受けて独立していった自営農民たちで、彼らは自分の農地を囲い込みして放畜するとか、畜舎を建てて養豚や養鶏を始めました。他方、多くの貧困の農奴たちは仕事がなくなって、農場から解放されて都市部に移っていきます。

それまで権力と資産を持っていた王族とかその周りの貴族や教会などが、影響力をどんどんどんどん失って、逆に自営農民が次第に力を持つようになってきました。それを可能にしたのが、実は農業協同組合という農民の運動です。一人一人ではあまり資材のない自営農民が連携して協同組合をつくって、肥料や飼料を共同で購入して、あるいは大きな新しい農耕機器を購入・共有して、そして地域に酪農工場をつくって、毎日自分のところで搾乳した新鮮な牛乳を運び込んで、チーズやバターや牛乳などの乳製品を生産するようになりました。そのような最初の農業協同組合ができたのが 1840 年ですけれども、そのまま全国に広がって、産業的にも非常な影響力を持ってきます。そして、こういう農民の意見をくみ上げた政党も出てきます。はい。次のスライドをお願いします。

他方、都市部に移って行った貧困農民や元農奴の人たち——町には、そういう人たちがたくさんあふれていました。当時はアメリカに移民する人たちもたくさんいました。それができない人たちは、町中の作業場や工場——当時の工場というと繊維工場とか木工製品だとかというようなところ。あるいは作業場では、家具をつくったり鍛冶屋などがあつたのですけれど——そういうところで働いたり、あるいは道路や鉄道や建物をつくる時の土木作業で、日雇い労働者として仕事を見つけて生活を立てていました。女性の場合は、農場で搾乳作業、乳を搾る作業をしたり、家政婦として大きな家に勤めたり、あるいは町にある小売店の店員をしたり、繊維工場などの仕事についたりして、それが典型的でした。

どちらにしても、これらの貧しい人たち、元農民の労働者の生活と権利を求めて労働組合ができます。1871 年のことです。そして、その労働者の政治的要求を受けとめる政党が社会民主党ですけれど、それができたのが 1876 年です。ヨーロッパで最も長い伝統を持っています。この社会民主党が、実質で国の権力を握ることになるのが、さらに 50 年以後です。1920 年、1930 年の経済的不況を背景にして国の権力を握ることになります。

イギリスの経済学者でジョン・ケインズという人がいますけれども、この人が、「国が市場経済に干渉・介入することによって、不況にあつた自由市場経済をコントロールできる」という理論、いわゆるケインズ経済理論を発表しました。社会民主党は、主にその経済理論

をもとに福祉政策を打ち出していきます。社会民主党で最初に首相になった政治家はスタウニングというのですけれど、そのスタウニングが、「スタウニングかカオスカ」（カオスというのは混乱という意味ですけれど）という政治的スローガンを掲げて、1930年代に国民から圧倒的な支持を得て、デンマークにおける現在の福祉政策の基本的な路線を築いたと言えます。はい。次の17番をお願いします。

「デンマーク・モデル」と書いてありますが、ここで簡単にデンマークの労働条件について触れたいと思います。デンマークの労働市場は、公共と民間の両方の分野で労使が交渉します。労使、つまり労働者と企業側が交渉して、賃金と労働条件の枠組みを決めています。その際に政府が、第三者として両者の間に、安全網となる基本的ルールが守られるように保障しているわけです。つまり企業側は、経営者として労働者の採用と解雇の権利を持つことが重要です。労働者側は、まずは労働組合に加入して団結する権利を主張します。そして、解雇されたときの生活保障、失業手当を確保することです。それを、このモデルで行っています。

このモデルは120年以上の伝統があります。正確には1899年以降ですけれども、これは労働市場における「デンマーク・モデル」と呼ばれています。現在では、賃金労働者の3分の2が労働組合に加入しています。公務員の場合は、100%組合に加入しています。このように労使の間で、最低賃金、労働時間、残業手当、退職金、年金、解雇条件など、いろいろな労働条件が契約で結ばれています。

それはどういう利点があるのかというと、一つは、企業側としては雇用・解雇が相対的に簡単で容易なために、経済・景気の変化にフレキシブルに対応できるということです。これは企業側にとっては、とても便利です。2つ目は、最低賃金を上げることによって、所得差を抑えることができる。組合の圧力で、最低賃金を高めにしています。3つ目が、労使の間で合意は得ていますから、労使闘争が比較的少ないということです。

4番目に、労働条件や労働環境の改善、保障を得やすいという長所があります。

一つの例として、労働条件——残業と休憩について見てみますと、まず残業については、自分たちが所属している組合によって若干異なっているのですけれど、基本的には就労時間は週37時間。基本的には残業はないのですけれど、どうしても残業しなければいけないという場合には、基本的には平均して週11時間以上は禁止となっています。さらに、次の仕事開始まで、スタートするまでに最低11時間の休憩時間があることが決められています。つまり、夜勤して次の朝出てくるまでに、3時間・4時間しか寝ていないなどということは、あり得ないのです。必ず11時間休憩時間をとらなければいけない。そういうことが決められています。ということで、労働者の権利がしっかりと守られていると思います。

はい。ここまでが一応セクション1の話ですけれど、何か御質問はありますか？

○ゆき どうでしょうか？ 「障害者福祉と自立」に行く前に、今までのところで何か質問

があったら、どうぞ。

ネットで入ってきている方、手挙げの印をつけていただくか、顔を出して手を振り回していただいてもいいけれど、だれが手を挙げる人いませんか？

オーストラリアのメイさん、今まで聞いて、似通っているところと違ってるところとかって何かあったのでしょうか？

○岩田真弓　こんばんは。

○ゆき　顔を出して。

○真弓　お久しぶりでございます。似通っているといえば、やはり守られている労働環境ですね、守られているところ。あとは、オーストラリアはアメリカ型の福祉のところ、一番初めの図だったのですけれど、私は「ああ、そうだったんだ」と改めて気づいてちょっとびっくりしました。オーストラリアも結構労働は守られているなど、自分の実感として思っていますけれど、デンマークはさらに上をいっているなどと思って、びっくりしながら聞いていました。はい。ありがとうございました。

○ゆき　ありがとうございました。突然、ごめんなさい。

ほかにどうでしょうか？　手を挙げでもいいし、顔を出して手を挙げてもいいですよ。

では、次へ行きましょうか。次のセクション。最後まで行くかどうか、スライドがたくさんあって心配なので、先を少し急いで…。

○片岡　それでは、第2セクションで18番目のスライドです。

「障害者福祉と自立」と書いてありますけれども、デンマークには次のような諺があります。「社会は、最も弱い人たちをどのように扱うかでちがが決まる」。ということで、これからデンマークで弱い人たち——ちょっと失礼な言い方ですけれど、障害者の状況を見てみたいと思います。次のスライドをお願いします。

第2次世界大戦後、デンマークはノーマライゼーションの考えをもとに、福祉国家として発展してきたと言えます。そのノーマライゼーションの考えを提唱したのは、バンクミケルセンさんといいます。これは僕が代表をしている DSSA・デンマーク社会研究協会の名誉会長だったのですけれど、このバンクミケルセンさんは、第2次世界大戦中にレジスタンス運動に加わったために、ドイツのナチスに捕まって強制収容所に入れられました。戦後、国の福祉行政に勤めることになりまして、主に知的障害児の親の会と一緒に、「障害者も一人の市民として地域で生活して、教育を受けて、仕事をして、家族生活をする権利を持っている」と、親の会の人たちと一緒に主張しました。

この左側で眼鏡をかけているのが、僕の若きころの写真ですけれど、バンクミケルセン

さんと一緒に写っています。あまりにもハンサムな男性なので、ちょっとわからないかもしれませんが、スライド次をお願いします。スライド 20 番目になります。

「ノーマライゼーションとは、一言でいえば平等とヒューマニズムの権利というような意味です」と、バンクミケルセンさんは簡潔に表現していました。そして、「障害から生じるニーズに対して、社会が特別な援助・支援をすることによって、障害のない人と同じ機会と可能性を得ることができ、対等な立場で社会活動に参加することによって社会的統合が実現する」と考えられています。そのことがここに書いてあるわけですが、ノーマライゼーションの基本的な考えということです。次のスライドをお願いします。

このノーマライゼーションの考えが、デンマークでは具体的にどのように福祉制度として実現されてきたのかということを見たいと思います。ただその前に、簡単に、デンマークの障害福祉がどう変化したのか、その歴史をちょっと見たいと思います。

今から 100 年ほど前の 1900 年代初期ですが、全国に十数カ所の障害児者の大きな入居施設・収容施設がありました。一見するとお城のような、立派な建物でした。入居者が数百人から 1,000 人以上の大規模な施設で、郊外の自然環境のよいところに建設されていて、コロニーとも呼ばれていました。施設長はお医者さんです。そして、入居者の大半は、当時精薄児者と呼ばれていた人たち、つまり今の知的障害の人たち。そのほかに発達障害や脳性麻痺、認知症、精神障害の人たちも含まれていたと思います。そして一般の社会から隔離された、独自の社会をつくっていました。地図でちょっと見にくいかもしれませんが、赤く点々がついているところが当時の大規模な入居施設です。次のスライドをお願いします。

障害のために、家族と一緒に生活することが困難になると、施設に入れられて、そこで一生を過ごすことになるのですが、子供たちは施設内で養護教育を受けて、病気になると施設で治療・看護を受けて、大人になると施設の農場や作業所などで働くことになります。これは 100 年ほど前の話ですが…。

30 年ほど前に、僕はデンマークの障害児施設の施設長と、大阪や北九州に講演に行ったことがあるのです。そのときの記憶にあるのは、北九州のある施設を見学して、そのあと講演会に行ったわけですが、最初に行った施設の様子が昔のデンマークにすごく似ているのです。多人部屋で、ベッドがずっと並んでいて、さらにそのベッドの上まで柵がついて、檻に近いベッドが幾つか中に置いてあった。それを見てデンマークの施設長が驚いて、それを講演のときに皆さんに報告されたのです。

そうしたら、講義が終わったあとに参加者が寄ってきて、「きょう見ていただいた施設は、国立の施設でとてもよいところなのです。私立の民間の施設に入っている子は、もっとひどいのですよ」という話をして、何とも言えない気持ちになったのが、今でも記憶に残っています。次のスライド 23 をお願いします。

ここで1人の例を見てみましょう。この青年、オールフさんといいます。子供の多い母子家庭に育って、学校でいじめにあって、勉強についていけないためにいろいろと悪さをしたようです。母親に愛想を尽かされて、14歳のときにある島の施設に送り込まれました。先ほどの地図にあった大規模な施設の一つがこの島に設置されていましたが、そこに送り込まれました。

今だったら、多分ADHDと診断されていたのかもしれませんが、当時は知的障害者の人たちと一緒に生活することになりました。7年そこで生活していて、施設の外にある作業場で見習い仕事をする機会を得ました。そこでの仕事を認められてそこで雇用され、施設を出ることになりました。その後、再び施設に戻ることはなかったのですけれども、彼は家庭を築いて、息子は大学まで行きました。次のスライドをお願いします。

その息子——この方は、デンマークの首相になりました。ポール・ニューロップ・ラスムッセンさんという人です。ただ、このポール・ニューロップさんが1993年に首相になった半年後に、1人娘が統合失調症で自殺されました。ということで、精神、福祉については非常に力を入れてくださっていました。現在も彼は、精神的な悩みを持つ若者の相談事業の全国組織「ヘッドスペースデンマーク」というのがあるのですけれども、そこの特別保護者として支援をされています。次のスライドをお願いします。

ちょっと横道にそれてしまったのですが、ノーマライゼーションの話に戻りたいと思います。前に紹介したノーマライゼーションの理念のもとに、1960年代から1970年代の期間に、福祉制度の法的基盤として幾つかの関連した法が制定されました。その中でも、生活支援法というのがあるのですけれども、それが特別な位置を占めています。この生活支援法に基づいて1980年には、それまでの国立の大規模な収容施設がすべて地方自治体の管轄に移管されて、さらに入居者の障害児者が、ニーズや希望に合わせて、地域に設けられた小規模の入居施設やグループホーム、あるいはケアつき住宅、あるいは障害者向けのアパートなどに移って生活をして、同時に地域にある授産施設などの通所施設を利用するようになりました。

障害者は十分な障害者年金で生活が保障されていますし、必要な介助やいろいろな福祉サービスも、地方自治体が責任を持って提供しているために、障害者も一般市民とほぼ同じレベルの生活を送ることができています。学校教育を受けている障害児も、国立の養護学校から移って、地域に設けられた特別支援学校や、普通学校に併設した特別支援学級あるいは普通学級で、統合教育として教育を受けていました。ノーマライゼーションの考えに基づいた障害児者の生活が、少なくともここで一応具体的な形を実現していると言えるのではないかと思います。

このあと、デンマークの障害児の教育、インクルーシブな教育についてお話をしようと思っていたのですが、時間の関係で割愛させていただきます。ということで、少し飛ばしましてスライドの29まで割愛します。

障害者福祉の展開ということで、1980 年代後半以降のことについて紹介しておきます。1980 年以降に、大規模施設型の福祉から地域型福祉に移っていったのですけれども、そこで二つの課題が出てきました。一つは、地域社会で十分に受け入れ準備・体制ができていなかったということです。障害者が地域に移り住んでも、地域の住民との交流もなければ、余暇時間を楽しめるところや、設備が整っていませんでした。しかも、中には地域住民から差別扱いされて、敗北感や挫折を感じて、精神的にダメージを受ける障害者が出てきました。多くの障害者が安心感を求めて、もとの養護施設や養護学校に戻ることを望む人が出てきました。

もう一つの課題は、より軽度な障害者が最初に施設を出て行ったために、より重度な障害者が残ってしまう施設が出てきました。そこでは障害者どうしのかかわりを通しての刺激が少なくなって、あるいは全くなかったので、ケアワーカーへの依存が大きくなって、ケアワーカーの精神的負担が大きくなっていくということで、支援者の中のバーンアウト現象が顕著になってきました。

これらの深刻な課題を解決するために、多様な試みが行われることになりました。例えば、地域での孤立と疎外から脱皮するために、障害者による文化活動が次々と企画され、障害を持っている人たちの独自の文化価値や、サブカルチャーの形成が求められました。音楽、芸術、演劇、創造活動などのワークショップや講演が、全国各地で企画されました。他方、施設に残った重度障害者の QOL の向上を目指した試みも多く行われるようになりました。音楽療法、障害者乗馬、水泳療法などです。また同時に、重度な自閉症や暴力行為のある人の対処の仕方、一部の施設を対象に高度な専門化が行われました。次のスライドをお願いします。

障害福祉政策のキーワードは、1960 年代以降は、「分権、脱施設化、地域志向、統合」などと言われていたのですけれども、それが 1980 年代後半から、QOL の向上だとか、尊厳性、専門性、個別ケア、自己決定、自立など変わってきました。特に若い身体障害者たちは、個人の自由と自立生活を求めて、施設から出て積極的に社会的活動を展開し始めました。次のスライドをお願いします。

デンマークでその先頭に立ったのは、筋ジストロフィー当事者のエーバルド・クローさんと彼の仲間たちです。彼らは、親やお医者さんが中心となって運営されていた施設や、障害者当事者組織の考え方に疑問を持ち、当事者の独自性と多様性を強調して、新しい障害者運動を展開するようになります。これはエーバルド・クローさん（3 年前に亡くなられたのですけれども）と、最期にお会いしたときの写真です。次、お願いします。

彼らは、多くの賛同者と一緒に屋外コンサートなどを企画して、障害者のリハビリ事業の資金づくりと、それから国民を対象とした啓発活動を行って、そして当事者が中心となった筋ジストロフィーの組織をつくり、障害者団体として国の障害者政策に積極的に働きかけ

ていきました。この写真は、グリーンコンサートという大規模なコンサート、屋外コンサートの写真です。緑の色で知られている「ツボルグビール」というのがあるのですが、その会社と提携し、スポンサーにして、全国 10 カ所で毎年こういう大きなコンサートをやっています。

コンセプトは、国内で最も人気のある歌手やバンドを、普通の報酬で雇いましてコンサートをする。入場料をすごく抑えて、そのかわり飲み物は、スポンサーであるツボルグのビールを買って飲んでいただく。さらに総勢数百人から 1,000 人近くのボランティアが協力して、ほぼ毎日場所を変えて、都市を変えてコンサートを行うという、とてもすばらしい企画です。次、お願いします。

デンマークのパーソナル・アシスタント制度は、1970 年代から 1980 年代にかけて、人口が 30 万人の地方都市オーフスで始まったので、「オーフス方式」と呼ばれました。筋ジストロフィーのクローさんたちの努力によって、1987 年の生活支援法の中に組み込まれて、全国的な制度として立法化されました。重度の障害者が地域で自立生活をするために、介助の面で経済的な負担が出る場合は、それを公的機関が負担するということになりました。

こうして重度の身体障害者でも、本人が直接、雇用・解雇するパーソナル・アシスタント制度によって、地域で自立生活を営むことができるようになりました。この辺について詳しくは、ユキさんが書かれた記事や、それから、これもユキさんが監修された「クローさんの愉快的苦労話」の中の解説を御参照していただければと思いますので、きょうは簡単に、このぐらいにしておきます。

○ゆき 今映っている写真が、何のことやらよくよくわからないのですが。。

○片岡 はい。この左の上の円形型の建物ですけど、これは筋ジストロフィー協会で作った休暇活動センターです。非常に立派な建物です。もちろん、バリアフリーとかそういうことも考えられていますし、いろいろなファシリティ、設備も整っているところで、海岸近くにあってすごく環境のよいところです。

それから、特に筋ジストロフィーでは、あまり長生きできない方が多いので、子供のときにとにかくよい体験をしていただこうということが一つ。それから、いろいろな事業を通して子供たちのためのリハビリ治療の資金を得ようということで、子供のためのサーカスを筋ジストロフィー協会で行っています。つまり、ロックコンサートだけではなくて、子供のためのサーカスなども行っています。そのときの写真です。

○ゆき ありがとうございます。お邪魔しました。どうぞ次に。

○片岡 はい。それでは、次のスライドをお願いいたします。

日本で障害者の自立生活が議論される場合、まず取り上げられるのが、障害者の就労についてという印象を受けています。つまり日本では、「自立生活とは、本人の就労収入による経済的自立」として理解される場合が多いような印象を受けています。そこで、デンマークでは障害者の就労支援がどうなっているかということを見てみたいと思います。ということで、就労支援の制度「FLEKSJOB」について簡単に説明したいと思います。

障害者の就労支援については、2種類あります。一つは、障害者年金を受けている方の就労支援です。これは最低賃金の5分の1程度の補助金を、職場を提供しているところに支給します。当事者は、お小遣い程度の報酬を受けることになります。これは主に、障害者向けの授産施設やデイサービスで使われている制度です。つまり、ケアつき住宅とかグループホームに住んでいる障害者の人たちが、地域にある通所施設、授産施設に昼間通って、事によっては労賃をいただく。お小遣い程度の労賃をいただくという制度です。

2つ目が、労賃の3分の2ないしは半分を国が負担して、障害者が一般企業や公共機関の労働市場で働くことを可能にする制度になっています。「FLEKSJOB」と呼ばれます。このFLEKSJOBは、ちょっとわかりにくいかもしれませんが、地方自治体が判定・評価をして、その利用が一度認められると、民間・公的部門にかかわらず、どの職場でも利用できるようになります。自動車免許と似たようなものです。

条件としては、リハビリを一応終了して、障害者年金を受けていない人です。助成金は賃金の2分の1ないし3分の2を占めているのですが、その助成金は障害者本人ではなくて雇用主に支払われます。その他の雇用条件は、普通のフルタイムの従業員と同じです。年間6週間の有給休暇とか、疾病手当とか、休職手当、労災法などが適応されます。

○ゆき 一番大事なところへ到達したいので、ちょっと急いでくださいね。

○片岡 では、パンッと飛ばしてもらいまして、スライド36まで行きます。最後のセクションです。皆様、お疲れ様です。

テーマが「社会の価値観について」というセクションになります。これまで、デンマークの高福祉・高負担で知られる福祉国家が過去どのようにつくられてきたか、形成されてきたのかということを駆け足で見てきたのですが、それは政治的に破綻した王政国家が民主的な議会制として再出発したところから始まります。そして、世界的な経済不況や政治変化に影響されつつ、農民と労働者がそれぞれ連携・協同しながら産業として発展させてきた。農業と工業の担い手として発展を進めてきたわけです。そのプロセスにおいて、国は国民の生活安全を保障する手厚い福祉政策を選んだわけです。同時にノーマライゼーションの理念に基づいた障害者福祉が進められてきたということを、簡単にこれまでお話しさせてもらいました。次に、飛びましてスライドの39までお願いいたします。

デンマークでは過去50年、ノーマライゼーションの考えに基づいて大規模収容施設か

ら地域福祉に変化していったのです。そしてそれが、いろいろな困難な課題に向かい合いながら、障害者の自立と共生社会を目指して展開してきたと言えると思います。これと並行してというか、重なって、デンマーク社会の価値観にも変化が見られるようになりました。1960年代を境に、「規律社会」から「ネットワークの社会」として性格づけられる価値観です。デンマークの学者さんで Svend Brinkmann さんという人がいるのですが、これはその方の理論なのです。次のスライドをお願いします。

見ておわかりかもしれませんが、1960年代より前の「規律社会」は、このように縦割り社会です。上下関係で成り立っている構造が特徴です。そこでの価値観というのは、とにかく軍隊的な厳しい規律・規則があって、個人よりまずは組織を優先しなさいと。そして、それぞれの義務・責任が大切だという、そういう道徳的な大義を掲げて、組織や上司に忠実であれと言われていました。そして、何事も結果・成果が大事なのだ。それで、まずは安全だという安全主義。これが当時の価値観でした。次のスライドに行きます。

それが「ネットワーク社会」というものによって変わってきます。ここではオープンで透明な社会。現実には常に変化して、変動している。プロセスなのだと。それだけにフレキシブルに対応することが重要であり、さらにそこでは個人のエージェンシー、主体性とか自律性が求められます。個人の連帯、自由さも大事ですし、1人1人の感性、そして楽しさ、快適さ、幸福というものが追求されています。組織も平たい関係で、非常に民主的である。規則はあるけれど、それは枠組みの規則として、大きな規則だけ。その中での責任というのは、それぞれの担当者が分担して行う。いちいち上司とか、組織とか、会社にお伺いを立てる必要はない。担当者が責任を持って行う。それには不確かさが伴うということで、失敗してもいい。逆にそこでは試行錯誤がよしとされます。

そういう中で一番大切なのがコミュニケーションであり、ダイアログである。そして時間も、残業する時間を延ばせばいいのではなくて、決まった時間によい仕事をするとか、親も忙しい中でも決まった時間を子供だけに使うという、質的時間を重視するという価値になっています。

これらの変化というのは、もちろん1960年代前後を境にして一遍に起きたわけではなくて、まだ今でも古い構造や価値観が残っているところもあります。ただ言えることは、こんにちではネットワーク社会の価値観というのは、少々大げさになりますけれど、デンマークでは当たり前な考え方、つまり価値観になっています。何か議論になったときに、あえて「プロセスが大事だ」「ダイアログが大切だ」なんていう、当たり前のことを主張する意味がなくなってきました。

同じように、「善い人生とは何か？」と…。私たちが意識するしないにかかわらず、毎日の生活や行動の無言の前提となっています。別な言い方をすると、何が善い人生かというのは、私たちの社会や時代において、それぞれごく当たり前と思われることなのです。

そして、実はこの当たり前が、いわゆる「倫理的な価値」と呼ばれるものなのですが、

だれもが意識せずに当たり前だとしている生活の前提、社会のあり方の前提となっているのが、この社会的な価値であり、倫理的価値です。

デンマークでは過去 50 年で「規律社会」の価値観から「ネットワーク社会」の価値観へ変わっていったわけですが、その様子を僕はデンマークで体験してきました。それはとても変化に満ちた、ある意味ではエキサイトしたプロセスであって、僕個人にとっても波乱に満ちた人生になりました。

日本にも、この「ネットワーク社会」の価値観をいいと思っている人がたくさんいます。ただ、それはまだ、こうあるべきだという価値観なのではないかと思っています。言ってみれば、それは意識の高い人が持っている価値観であって、多くの日本人には当たり前だとして内在化していない価値観ではないかと思っています。

さらに悲観的な見方をすると、日本ではまだ当たり前の価値、つまり行動するときの基準、当たり前の価値——それが倫理的価値なのですが、もしかしたらまだ「規律社会」の価値観なのではと、疑問を持っています。

もしそうであれば、これらの当たりの意識や価値観を変えるにはどうしたらよいのか？ 『前例を超える・前例を創る』、こういう意味での当たりの価値を超えて、当たりの価値を創るにはどうしたらよいのかを考える必要があるのかと思っています。

一応こんなところで、お話は終えてしまって大丈夫ですか？

○ゆき せっかくですから、質問を受けることにします。

スライドの最後に、3 番目の事故で亡くなった坊ちゃんの写真があります。お会いしたことがあるのでつい涙ぐんでしまうのですが、そこはあとで見ていただくことにして、今までのこと何なりと質問してください。

ちょっと時間は超えているのですが、こんな機会はめったにないので。よかったら院生さんのほうからあったらどうぞ、どうぞ、どうぞ。前へ出てきてください。

○松田清人 大変すばらしい講演で、ありがとうございました。デンマークの、今までのよって来るところ、今あるというのがとてもよくわかりました。

ということは、逆に考えれば日本も今をスタートにして、あと 20 年後とかもっと早くに変わり得る可能性があるということが、最後に腹に落ちたと思いました。デンマークもそんなに簡単にはいかなかったのだなということがわかってだけでも、大変参考になりました。どうもありがとうございました。

○ゆき 50 年かけてこういうふうに変わってきた、その中にユタカさんはおられたということですね。

今、ネットで入ってらっしゃる方、どなたか最後お 1 人ぐらいどうでしょうか？ デンマークに行ったことがある人。生井久美子さん、何か言えますか？ どなたでも結構ですよ。

あ、いたいた。はいどうぞ。久美ちゃん、何か疑問に思ったことを、一言。

○生井 最後の価値観の変化というのは、そうなんだと改めて思いました。

二つ質問があるのですけれども、ユタカさんが一番大切な価値は何かというか…。いろいろな価値観があると思うのですけれど、その中で御自身の人生を通して、二つの国で過ごされて、御自身にとって一番大切な価値は何かということが、一つ目の質問です。

もう一つは、デンマークには日本からすごい数の人が学びに行って、万に達するのではないかと思うぐらい、何十年間にもわたってたくさんの人が研修とか学びに行っていると思うのです。それもいろいろな立場の人、行政の人も含めて、現場で働く人や学生も含めて…。だけれども日本が変わってこなかった理由と、それを変えていこうとすると、どこからどのように変えるのが一番いいと思われるかと、その二つを教えてくださいませんか。

○ゆき ユタカさん、どうでしょうか？ 何か難しい質問を…。

○片岡 そうですねえ…。

○ゆき 向こうにいるユタカさんに聞くより、私たちが考えないといけないようなことのようにも…。

○片岡 一つは、善い人生とは何かということでお話ししようかと思っていたのですけれど、デンマークの倫理哲学者で Jørgen Husted という人がいるのですけれど、僕は彼のところで、大学院で勉強したのです。彼によると、「善い人生を得るためには、幾つかの条件を満たす必要がある」と。その一つが、「苦難や不快感がなく、快適な生活を送っていることだ」と。もう一つが、「自分で決めた道を歩んでいるということ。しかも十分な情報のもとに、よく考えてから選択することということ」です。三つ目が、「自分の持っているあらゆる能力を引き出して発揮できること」。それから、「社会的価値のある活動を行うこと」。そして最後が、「人として成功すること」ということがあります。

最後の二つが非常に大切なかと思っています。社会的な価値のある、意義のある活動することと、それからとにかくあまり悪いことをしないこと。僕も若いころはいろいろ悪いことをたくさんしました。すみませんでした。ということで、人として成功するのはなかなか難しいです。このようなことでよろしいですか？

○生井 ありがとうございます。

○ゆき 彼は亡くなってしまったけれども、挑戦はし続けたんですね？

○片岡 次男坊のキャスパーです。あと、連れ合いのインデと、それから3人は、一番右側が長男のケニー、真ん中が長女のユキ、そしてその左が次男坊のキャスパーです。キャスパーは高校を出て、2年ほど郵便局でアルバイトをしてお金をためて、さてこれから何をしようかということを見極めるためにオーストラリアとニュージーランドに旅行に行ったのですけれども、そのニュージーランドで、事故で亡くなりました。その彼の写真です。

本当は時間があればここで皆さんにこのお葬式に出席していただいて、善い人生とは何かを皆さんと一緒に考えていただこうと思っていたのですが、時間がないので、きょうはこれでお話は終わりにしたいと思います。

○ゆき ありがとうございます。

日本はどうすべきかは、『前例を超える・前例を創る』という、このシリーズでかんがえていただきたいのです。このシリーズに出ていらっしゃっても、会社や病院で昇進できるとか、そういうことはないにもかかわらず、ずうっと15回参加してくださっている方たちがこんなにたくさんいらっしゃるというのが、日本も変わっていけるのではないかなあという、かすかな望みを持ったりしているところでございます。

丸木先生、ここに来て、まとめの言葉を言っていただけますか？

○丸木 どうも、丸木です。きょうは本当にいい話をありがとうございました。

私はデンマークを全然知らなくて、レジュメを読ませてもらって、「何とうらやましい国だなあ」ということしか感じなかったのですが、お話を伺って、デンマークも規律社会であって、あれだけの大収容施設があったのだと思いますが、50年で変わったということであらためて聞くことができ、本当に勉強になりました。

中でも最後のお話にあった「ネットワーク社会」ということについては、今ちょうど日本は選挙ですけれども、莫大な負債を抱えて、コロナで何人も死者がふえて、日本の福祉はどこへ行ったのだろうという感じを持つところですが、その日本でも、デンマークのたどった道をふんでいけば、変われるところあるのではないかという、逆の方向性を示していただいたような気がして、本当に勉強になりました。ありがとうございました。

○ゆき 本当にありがとうございました。拍手の音が聞こえますか？ ありがとうございました。

○片岡 長い間、居眠りせずに、ありがとうございました。

○ゆき メールで審問を送ってくださったら転送しますので、もしかしたらお答えが…。でも日本語で返事を書くのは大変かもしれないけれど。。。

では、時間も大分超過してしまいましたので、これでおしまいにしたいと思います。皆さま

んからきょうの感謝の言葉をメールにして、拍手だけではなくて、メールにしてユタカさんに送っていただければと思います。長時間、ありがとうございました。